ぶっくレビュー

『有機農業ハンドブック　土づくりから食べ方まで』

日本有機農業研究会編集（農山漁村文化協会）

待ちに待った待望の本が出版された。有機農業に関する多くの本が刊行されているが、ここまで体系的、かつ実践的視野でまとめられた本は、はじめてであろう。

本書の編集・発刊に当たった日本有機農業研究会は、一九七一年十月に発足している。当時は、高度経済成長下で工場排水・排煙等に対する反公害運動をはじめ、農薬の毒性問題、食品添加物への不信の高まりを背景に、農業の在り方、食の安全性への関心が高まった時期でもあった。そうしたなかで、同研究会は今日に至るまで有機農業の探求、実践、普及・啓発を進めるべく、生産者、消費者、研究者同士の交流をベースに、極めて重要な役割を果たしてきた。

今日では、有機農産物をめぐって小売、量販店、デパート、商社、外食産業等を巻き込んだ「有機農業ビジネス」があたかもブームのごとき状況となっているが、草創期の有機農業生産者が、いわゆる変人・奇人扱いされたことを思い起こすに、まさに隔世の感がある。

とはいうものの、「農」「食」の在り方からスタートした有機農業運動が、今日のブームともいえる状況に対して、今一度原点を問い直す意味においても、本書が刊行された意義は極めて大きい。

さて本書は、まさに有機農業実践への手引書といってよい。執筆陣は、生産者が中心であるが、研究者達も実践に裏付けられた方たちばかりである。

第一章「有機農業の基本技術」、第二章「農学から見た有機農業」は、思想・理論・基礎編に当たり、土づくり、肥料、病害虫、雑草、微生物、生態系等の有機農業の基本的事項が明記されている。慣行農法、すなわち既成概念からの脱却の勧めでもある。ここでは、有機農業に適した品種が五ページにわたり紹介され貴重な資料ともなっている。

第三章「豊かな自然を活かした有機農業技術」は、穀物、野菜、果樹、畜産にかかる技術編である。水稲では、有機稲作の基本から合鴨、鯉、ザリガニ、レンゲマルチ等による除草技術の先駆的な取り組みも紹介されている。野菜づくりでは、「苗半作」ともいわれる苗づくりから始まり、果菜・根菜・葉菜・鱗茎類の各野菜栽培技術が栽培難易度、推奨品種とあわせて記載されている。また果樹では、多くの品種が明治期以降近代化農法とセットで導入されたため技術開発が遅れていること等が記されているが、基本はやはり日本の気候、風土に適した品種が推奨されている。

また「畜産」については、遺伝子組み替え作物が増加する中で、自給飼料の確保の重要性が述べられ、庭先養鶏、山地酪農、短角牛、黒豚等の飼養技術が紹介されている。飼養技術の基本は、観察眼を鍛え、健康な家畜を育てることに尽きる。

第四章「手作りの楽しさ」では、四季の素材を生かした食品加工の数々が紹介され、直接農業に携わっていない人でも良質の素材を入手すれば、食卓を豊かにすること請け合いである。第五章「地域へ広げ、次代につなぐ」は、学校給食等を通じた地域、次世代への運動の広がりを展望している。

イラストがふんだんに取り入れられ、素人にもわかり易く読んでいて実に楽しい。有機農業に取り組んで壁にぶつかり悩んでいる人、これから始めようとしている人たちに勇気とヒントを与えてくれる本である。

（一九九九年一月、三四五頁、三、八〇〇円）

（木原　久）